

ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2018年12月
理系頭の資産運用術
(① 帰納法と演繹法)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038
福島県南相馬市原町区日の出町167-3
info@next-life-consult.com

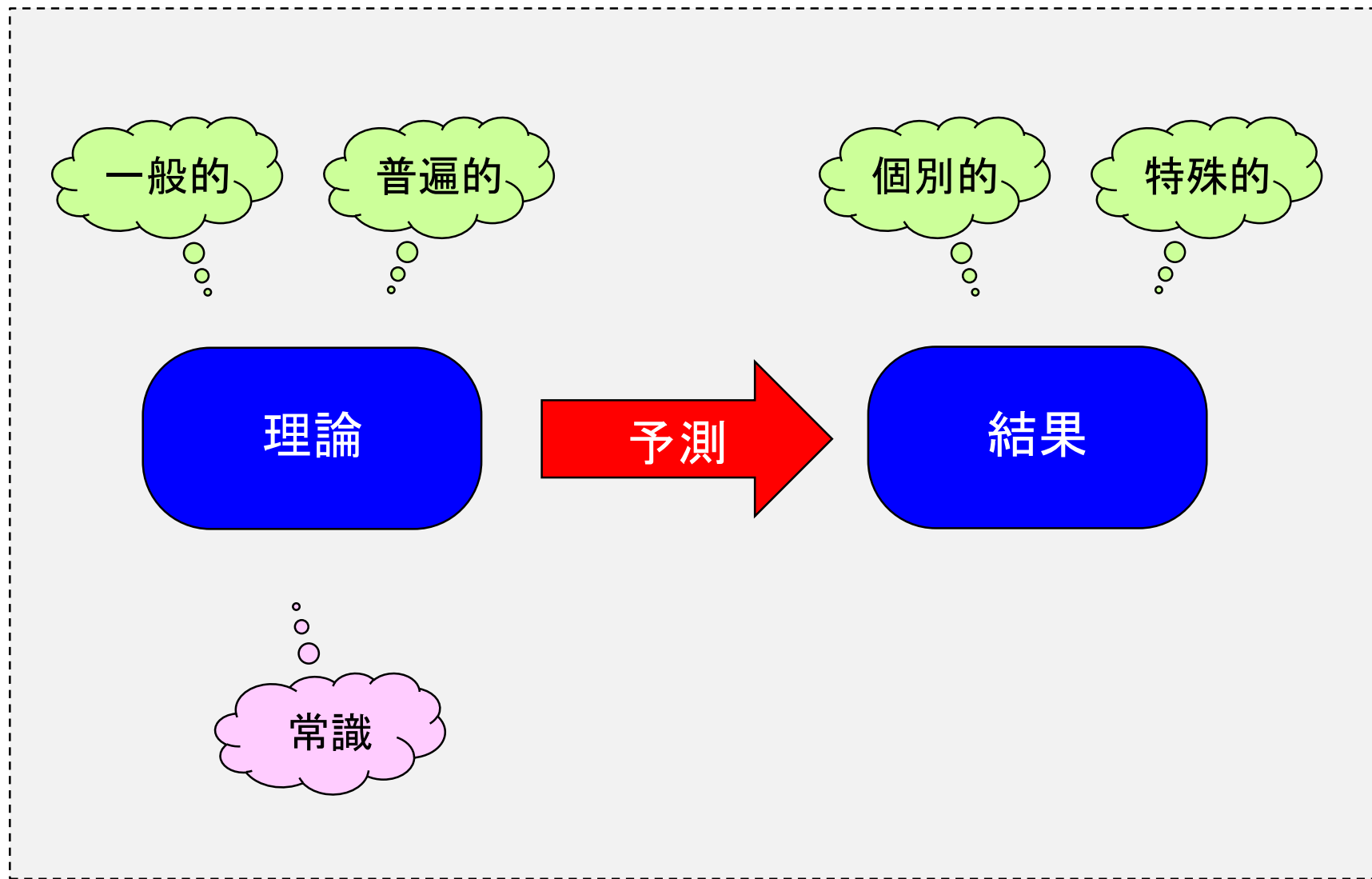


ピカイチ先生

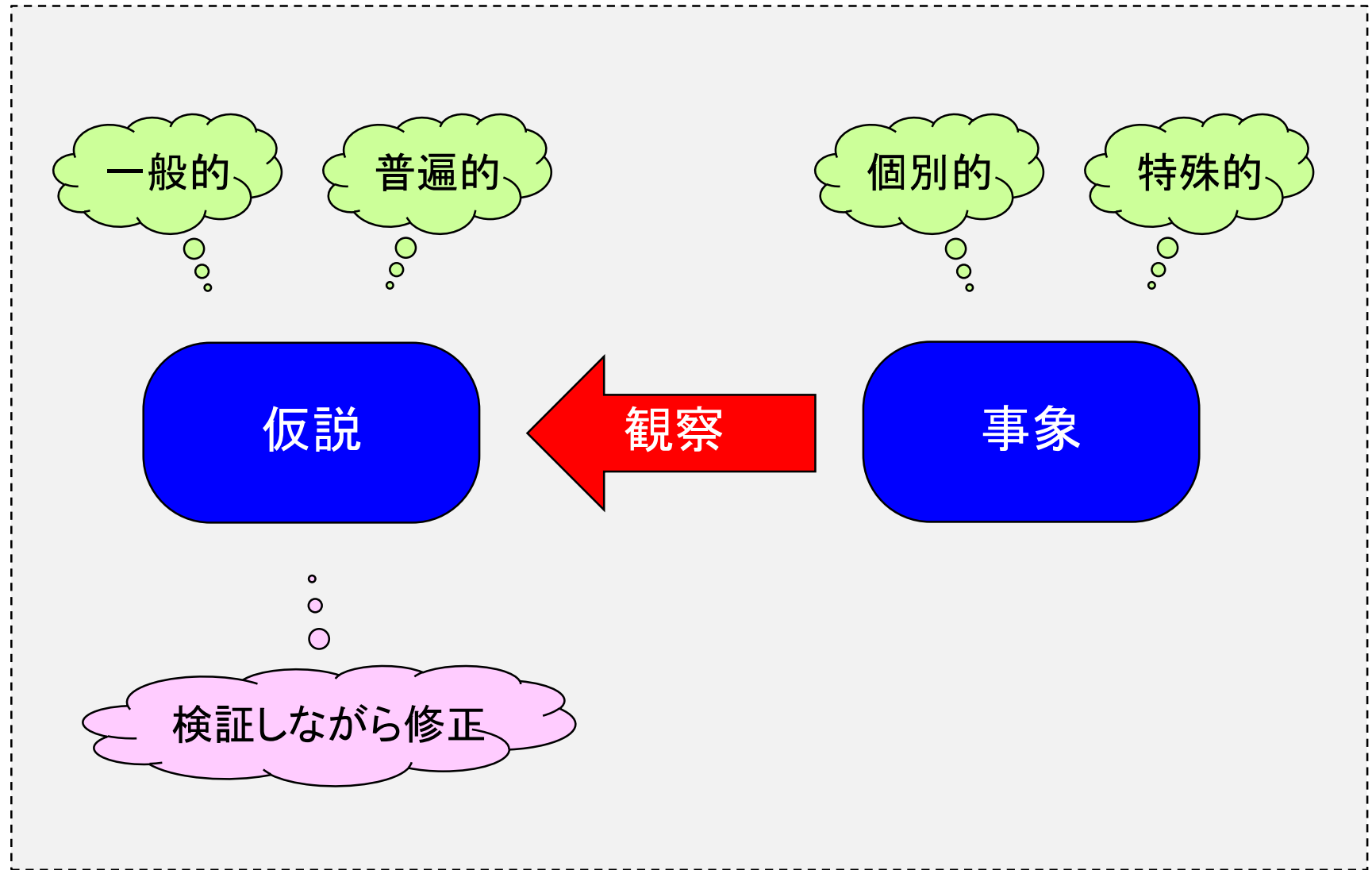
ピカイチ生活経営塾

検索

演繹法とは？



帰納法とは？



演繹法で生きた、前提は？

日本債券信用銀行(現おおぞら銀行)が一時国有化されたあとの頭取だったプロモントリー・フィナンシャル・ジャパンの藤井卓也会長が日本経済新聞の取材に応じた。

日銀時代に長期信用銀行や金融危機をどうみていましたか。

「95年ごろ考査局の考査役として日本長期信用銀行に出向いた際、経営陣に『金融債でこんな金利は後々支払いができなくなる』と伝えても『既にやってしまったので』といった具合で見通しが甘かった。これは持たないと感じた」

不良債権問題はなぜ起きたと思いますか。

「日本は戦争で大都市の資本が失われた。長信銀は地方から資金を集め、中央の大企業を育てるために生まれた。役割を終えたら解散すべきだった。オーバーバンキングが叫ばれた時代で、新しい時代への適応が遅れたことが原因だろう」

『長銀・日債銀破綻20年』(2018.12.14 日経新聞)より

帰納法で生きる、仮説は？ (1/2)

日本の履歴書は、現在の仕事に遠いものから書きます。小学校、中学校、高校、大学と学歴を書いてから、職歴に移り、入社してから現在までどのような部署でどんな仕事をしてきたかを書きます。

こうした日本の履歴書を、私は「位置エネルギー型」と呼んでいます。

しかし、欧米は「運動エネルギー型」です。現在から過去にたどっていく。

「結局、あなたは何ができる人なのか？」という結論が最も重要なので、先に述べるわけです。

(次頁につづく)

『必ず食える1%の人になる方法』(2013.09.12 藤原 和博)より

帰納法で生きる、仮説は？ (2/2)

10年後、おそらくすべての産業界で、現在10位までの会社が5社ぐらいになるでしょう。要するに、つぶれるか合併するかで淘汰される。

これまで10年間にも淘汰が起こりました。業界ごとに20社ぐらいあったのが、10社程度に減ってしまった。それが今後10年間で、さらに半分になると思います。

そして、残った5社のうち、半分の2~3社は外資系になります。

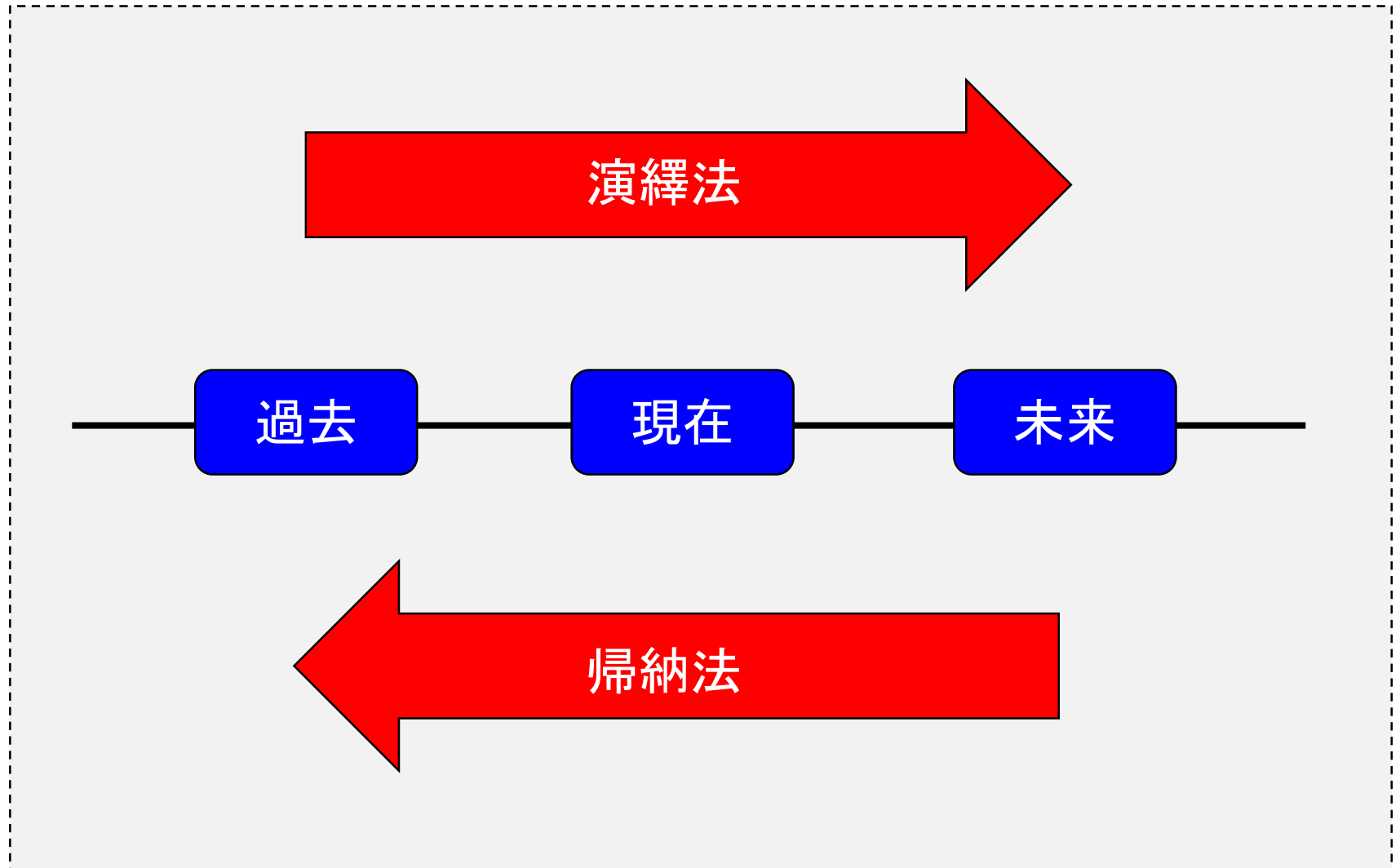
しかも、昔のようにアングロサクソン系ではなく、韓国系や中国系、インド系だったりする。自分の上司がある日、インド人になってしまうことも高い確率で起こりうるのです。

自分の「エンプロイアビリティ（雇用され得るための能力）」を高めるうえでも、やはり自分の履歴書を英文にして、それを英語でアピールできるようにしておくことは重要です。

その準備をしておくかどうかで、いざというときの雇用のチャンスが倍になるか、半分になるかが決まります。

『必ず食える1%の人になる方法』（2013.09.12 藤原 和博）より

時間の流れが異なる



未来の社会はネット内に建設される (1/3)

もともと、未来社会と言っても、10年くらいでは街の見た目は変わらないかもしれません。この10年の一番の変化はスマホの向こうにつながった「ネット内」で起こるので、それがどんなに激しくても外見には現れてこないからです。

「バック・トゥ・ザ・フューチャー」や「A. I.」などの未来社会が描き出すような、車が空やビルの壁面をビュンビュン飛び回るような光景は、当分見られないと思います。それに、東京スカイツリーや、あべのハリカスよりも高い建物はもういないでしょう。

それでも、親世代は、大きなビルやタワーが続々と建ち、高速道路が通り、新幹線が走り、大型船が就航し、飛行機もどんどん大型化する時代を生きてきました。だから、目の前に突然立ち上がった大型の建造物や乗り物に興奮し、物や街の外見上の未来に夢を抱くことができた。鉄やコンクリートで作られた未来にです。

(次頁につづく)

『10年後、君に仕事はあるのか?』 (2017.02.09 藤原 和博)より

未来の社会はネット内に建設される (2/3)

一方、君たちの世代は違います。建設が街で起こるのではなくネット内で起こるから、見えない。可視化されないから夢を託しにくいんです。ネットの向こうの実態は見えないし、いたるところに埋め込まれたチップもセンサーも超小型して隠されている。さらに先端技術も、ナノテクノロジーやiPS細胞のように微細で見えない領域に向かっています。未来が見えにくくなったから、夢の在り方も変わっていくはずですね。

こうして、世界の半分がネット内に建設されるようになると、君たちは自然と、人生の半分以上をネット内で暮らすようになります。

仕事が消滅していくのは、のちに述べるように、AIとロボットが人間のやっていた処理仕事を奪っていくという面もあるのですが、より本質的には、世界の半分がネット内に建設され、人間がその世界で人生の半分以上を過ごすようになるからです。このことは、未来社会の大事な本質なので、(中略)

これが、親世代と君たちの生きる世界の決定的な違いになります。

(次頁につづく)

『10年後、君に仕事はあるのか?』 (2017.02.09 藤原 和博)より

未来の社会はネット内に建設される (3/3)

さて、ここで、もう1つ質問です。

AIが急速に発達していくと、人間の仕事が奪われ、人類の脅威になるということがいま世界中で議論されているのですが、君はどう思いますか？

ネットワークとつながったAIの高度化は、人間にとって脅威でしょうか？

僕はこう考えています。

ネットワークが広がれば広がるほど、AIが高度化すればするほど、人間がより人間らしくなるはずだと。人間は、人間じゃなきゃできない仕事をするようになり、人間本来の知恵と力が生きてくるだろう、と。

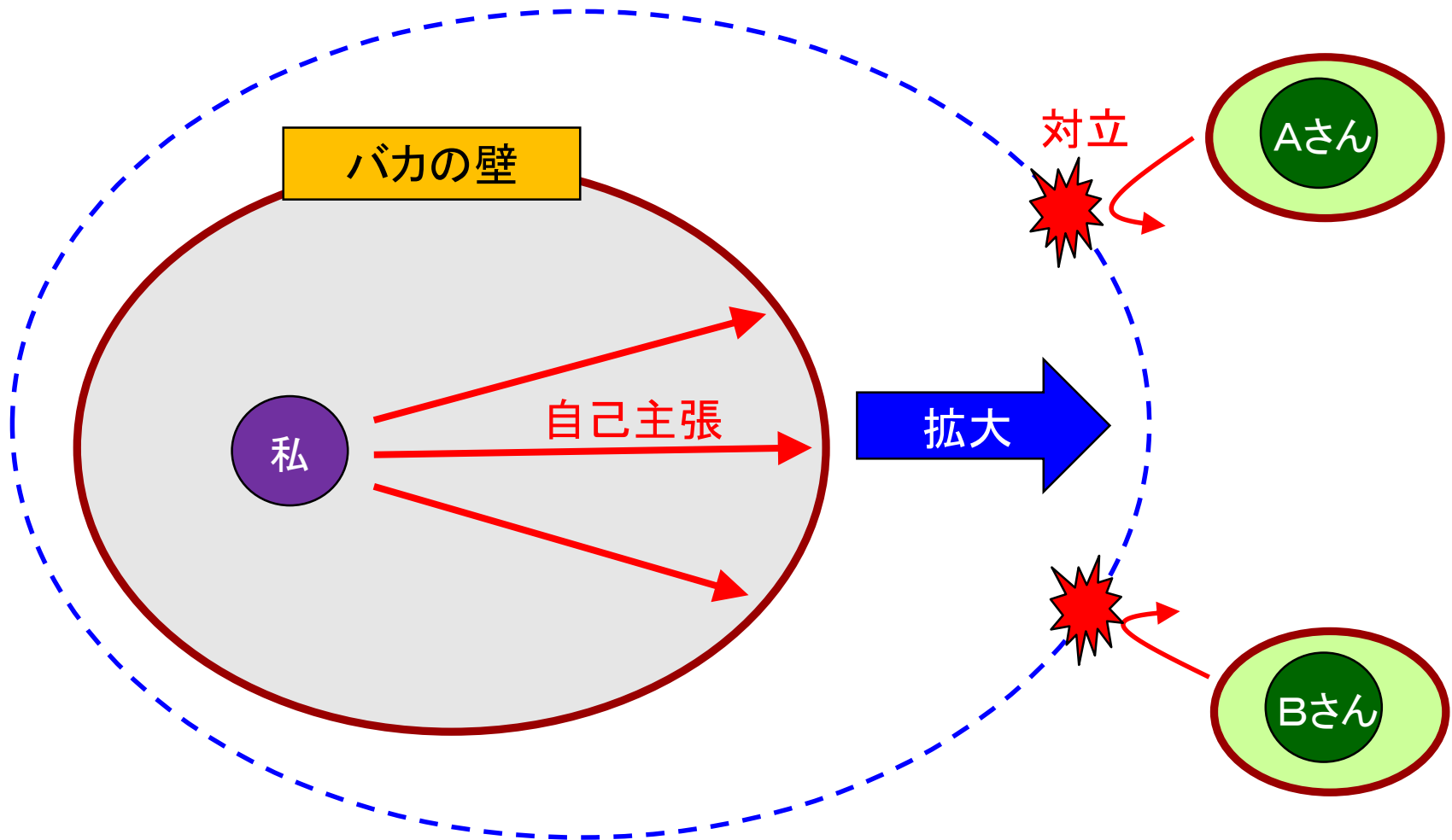
学校の先生の仕事が良い例ではないかと思います。

どんなにネット上に知識が蓄積されても、その前に立つ先生の仕事はなくなる。子どもたちを動機づけたり、ときには叱ったり、背中を押したり、勇気づけたり……そうした人間にしかできない仕事がますます大事になってくる。

『10年後、君に仕事はあるのか？』 (2017.02.09 藤原 和博)より

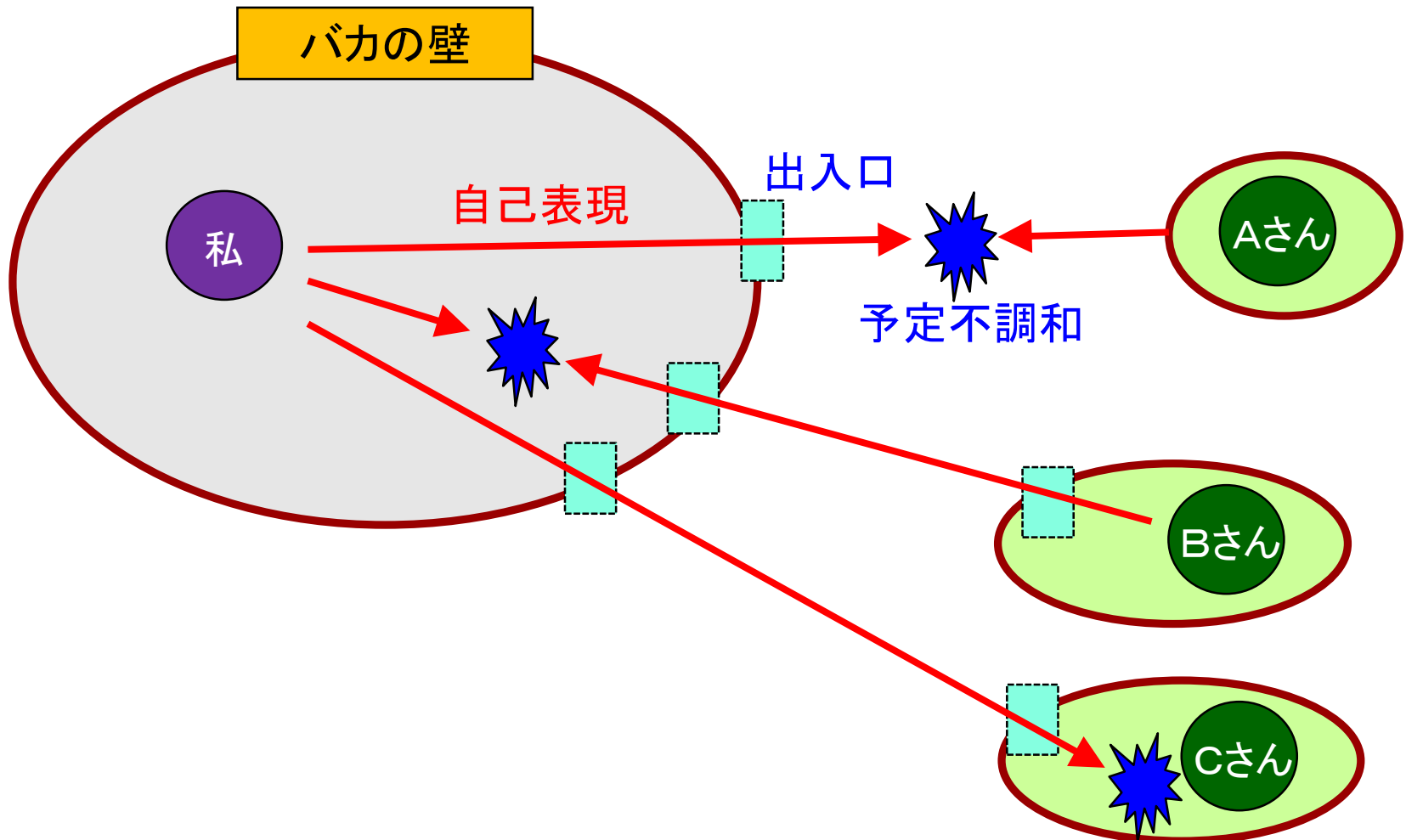
多様性の中、演繹的な生き方

【原則】
話せばわかる



多様性の中、帰納的な生き方

【原則】
話してもわからない



ある会社の常識は、他の会社の非常識

日本人特有の問題は、彼らは、ある掟を守って行動しているとき、他人は必ずその自分の行動の微妙なニュアンスをわかってくれる、という安心感を頼りに生活するように育てられてきた、というのである。

この指摘を読んで、幾つかの会社を渡り歩いてきた私が感じるのは「ある会社の常識は、他の会社の非常識」だということです。電通に勤めている人は電通にまかり通っている常識を「世間の常識」だと勘違いしています、BCGに勤めている人はBCGでまかり通っている常識をやはり「世間の常識」だと勘違いしている。つまり常識というのは非常に文脈依存性があるということです。

何度か転職すれば、自分が所属していた会社＝世間での常識が、そこでしか通用しない常識だったのだという認識を持つことができるのですが、同じ会社にずっといるとそういう相対化は難しい。つまり、会社という「狭い世間」の常識が、社会という「広い世間」の常識と異なるということに気づけないわけです。

『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？』（2017.07.20 山口 周）より

知的反逆

過去の哲学の歴史を一言で表現すれば、それは「疑いの歴史」ということになります。それまで定説とされてきたアイデアやシステムに対して、「果たして本当にそうだろうか？」と考えてみる。全ての哲学は、このような「疑い」を起点としてスタートしています。

(中略)

アーレントは、アイヒマン裁判を傍聴した末に、悪とは「システムを無批判に受け入れることだ」と指摘しました。一方で、過去の哲学の歴史は全て「システムへの疑い」を起点にしている。これはつまり、哲学を学ぶことで、「無批判にシステムを受け入れる」という「悪」に、人生を絡めとられることを防げるということです。

世界というシステムが発展途上の段階にある以上、世界システムを構成するあらゆるサブシステムもまた発展途上の段階にあります。従って私たちには、そのシステムに疑いの目を差し向け、より良い世界や社会の実現のために、何を変えるべきかを考えることが求められているわけです。

『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？』（2017.07.20 山口 周）より